

牝
メドレ
女歌

～犯された放課後～

ORIGINAL STORY/ATELIER KAGUYA
NOVELIZATION/MASUMI WATANABE
ORIGINAL ILLUSTRATION/M&M

プロローグ

5

第1章 人妻の熟れた肉体

11

第2章 生徒会長の青い身体

49

第3章 恋人の試練

97

第4章 美術女教師の失敗

147

第5章 意外な真実

199

エピローグ

225

プロローグ

寝室に、甘い女の声が響いた。

「あつ、ふうん、はああん……遼、好きよ……遼……」

ストレートロングの黒髪が印象的な、美しい少女だった。床に横たわる少年に逆向けてにまたがりながら、ペニスをいとしそうに舐めしやぶっている。

青っぽい色の制服を着ているのだが、スカートはめくり上げられ、真っ白な双臀と、するぷるした肉を丸くまとった太腿が丸見えだ。

少年が手を伸ばして秘部をいじるたび、少女は白い喉^(のど)をさらし、甘い声を上げて悶^(もだ)える。

高宮紗月^(たかみやさつき)。女子校生にして財閥である高宮家の当主、そして、彼女の通う私立辰陵学園^(しんりょうがくえん)の陰の支配者とウワサされる存在だ。辰陵学園は、彼女の曾祖父^(そそうそふ)が創始者なのである。

紗月はハイティーンの少女なのだが、彼女のまとうけだるげな雰囲気のせいで、年よりも大人びて見える。

モデルさながらのプロポーションが汗で光り、制服の間からは豊満な乳房がまろび出す。ペニスを舐めしやぶる上品な顔立ちはほんのりと上気して美しいが、どこかなげやりな、アンニュイな雰囲気を放っている。長くつややかな黒髪が頬に絡まり、ドキッとするよう

なセクシーさを発散している。

「姉さんっ……」

白い女体に逆向きにのしかかられている少年は、怜俐な美貌の持ち主だつた。紗月と似通つた面差しをしているため、少女のようにも見えるのだが、切れ長の瞳と薄い唇に、酷薄そうな影がある。高宮遼。紗月の実の弟だ。

高宮家はふたりだけ。両親はとうに鬼籍に入り、親類縁者も係累もいない。ふたりきりの姉弟は、愛情と信頼の絆で固く結び合はさつていた。

遼が秘部に当てた指を動かすたびに、紗月の蜜壺がみだらな水音を立てた。姉の秘部はぷつくりしてかわいらしい。ラビアは興奮のあまり花がほころぶように開き、内側の粘膜をあらわにしている。熱帯の花のような甘い匂いは、紗月が興奮したときに放つフエロモン臭だ。

紗月は、弟のペニスにいとしそうに頬ほおづりした。美貌が自らの唾液と先走り液で汚れるが、セクシーな姉は少しも気にしてないようだ。

遼は巨根だつた。肉茎は紗月の手首ほどの太さがあり凶暴に反り返つてゐる。エラが張つた剛直は、先端の剥けたところだけが鮮やかなピンク色だ。姉の纖手せんしゅが剛直をいじるたび、亀頭から先走り液がこぼれ、剛直を光らせる。

姉は弟にささやいた。

「遼、愛してるわ。お願ひがあるのよ……」

「ああ、なんでもするよ……姉さんの頼みなら、どんなことでもする」

遼は指を動かしながら答えた。ラビアが形作る桃色の粘膜の中央に、膣ヒダをみつりと集めた膣口がある。指を入れると、粘膜がちゅるつと吸いついてきた。

「理由は言えないのだけど、いいかしら？」

姉は底なし沼のような人だった。探つても探つても、芯の部分に行き着けない。紗月ほど美しく、ナゾめいた女性はいなかつた。ふんわりと包みこんでくるようにやさしいのに、本音の部分は誰にも見えない。

「もちろんだよ。姉さん。愛している」

「私も愛してるわ。遼がいれば、ほかになにもいらない」

紗月は、慈愛に満ちた聖女のようにほほえみながらも、瞳を蠱惑的に輝やかせた。

「でも、私のお願ひは、むずかしいかもしれないわ。いくら遼でも、大変だと思うわよ？」

紗月は、いつたん身体を起こすと、遼の体にまたがつてきた。

腰を浮かせた状態で止め、自分の唾液で光るペニスを片手で持ち、もう片方の手で大陰唇をラビアごと開く。

形の良いヒップやぷるぷるした肉を丸くまとった太腿の内側はもちろん、すべてを弟に見せつけているかのようだ。

耐えきれず腰を突き出そうとする遼の上に、紗月がゆっくりと腰を下ろしてきた。

「んっ、んんっ……はああああつ……」

みつしりと合わさった膣ヒダが、遼の亀頭で搔き分けられ、ザラつく膣壁を亀頭のエラでこすりながら奥へ奥へと収めていく。

「あああ……気持ちいい……遼のチ×ポ、最高よ」

紗月の尻タブが遼の腰に密着し、いきり立つたペニスが根元まで収められた。紗月は、膝を使つてゆっくりと腰を上下しはじめる。

「遼っ、んっ、いいつ。感じるつ……いいのおつ」

大陰唇がいっぱいに開き、遼のペニスを咥えこんでいるその先で、小指の先ほどの大きさのクリトリスがかわいらしく尖つている。

腰を落とすとき、遼の陰毛で秘芽をこすられる感触がたまらないのか、紗月の顔がエツチっぽくゆがむ。

紗月の腰をささえていたる遼の手を、紗月がきゅっと握つてきた。

「私のお願ひ、聞いてくれるわよね？」

「ああ、いいよ。やるよ。どんなこと？」

「女を四人、奴隸にして欲しいの」

弟の耳に、紗月の声が妖艶に響いた。

言つてくれよ。姉さん



「わかった、やるよ
遼は即答した。」